

第31回 医学教育指導者フォーラム開催要綱

趣 旨	大学医学部における医学教育の改善並びに教育研究組織の円滑な管理運営に資するため、医学教育について責任ある立場にある方の参加を得て、医学教育の様々な問題について情報の交換並びに討論を行う。
主 題	社会に開かれた医学教育
主 催	公益財団法人 医学教育振興財団
期 日	令和元年7月23日(火)
場 所	東京慈恵会医科大学 大学1号館講堂(3階) 105-8461 東京都港区西新橋3-25-8 電話:03-3433-1111(大代表)
参加者	国公立医科大学学長、医学部長、医学部附属病院長及び教務委員長等
参加費	5,000円
講 師	Judy McKimm (Director, Strategic Educational Development / Professor, Medical Education, Swansea University Medical School, UK) Sir Terence Stephenson (Nuffield Professor of Child Health, Institute of Child Health, University College London / Formerly Chair, General Medical Council, UK) 山口 育子 認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長 中村千賀子 認定NPO法人健康と病いの語り DIPEX-Japan 理事 中村真理子 東京慈恵会医科大学教育センター教授

日 程

09:15 ~ 10:00	受 付		進行) 医学教育振興財団事務局長 和氣 太司
10:00 ~ 10:20	開 会	〈開会挨拶〉 〈挨拶〉 〈趣旨説明〉	医学教育振興財団理事長 小川 秀興 文部科学省高等教育局医学教育課長 丸山 浩 東京慈恵会医科大学教授/教育センター長 福島 統
10:20 ~ 11:20	講演 1	Patient and public involvement in undergraduate medical education	Judy McKimm
11:20 ~ 11:50		〈質疑応答〉	司会) 奈良県立医科大学副学長 車谷 典男
11:50 ~ 12:50	昼 食		
12:50 ~ 13:50	講演 2	Society and medical education from a U.K. perspective - how medical education in U.K. has changed, is changing and will change according to social changes.	Sir Terence Stephenson
13:50 ~ 14:20		〈質疑応答〉	司会) 福井大学医学部長 内木 宏延
14:20 ~ 14:30	休憩		
14:30 ~ 16:50	総合討論「社会に開かれた医学教育」		司会) 日本医学教育学会理事長 鈴木 康之 山口 育子 話題提供 社会が求める医師の養成 話題提供 DIPEX-Japanによる「語り」のデータベース - 患者が主人公の医療実践へのメンターとして 中村千賀子 話題提供 市民・患者さんが参加する医学教育 中村真理子
16:50 ~ 17:00	閉 会	〈閉会挨拶〉	医学教育振興財団理事長 小川 秀興
17:20 ~ 19:00	レセプション		

社会に開かれた医学教育（趣旨と背景）

東京慈恵会医科大学
教授/教育センター長 福島 統

わが国では今、日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育の分野別質保証の活動が進んでいる。各医学部は世界医学教育連盟（WFME）グローバルスタンダード2015年版に準拠した医学教育分野別評価基準日本版による自己点検評価と第三者評価を受けている。この基準には、「教育に関わる主要な構成者」（学長、学部長、教授、理事、評議員、カリキュラム委員、職員および学生代表、大学理事長、管理運営者ならびに関連省庁が含まれる）だけでなく、「広い範囲の教育の関係者」（他の医療職、患者、公共ならびに地域医療の代表者（例：患者団体を含む医療制度の利用者）が含まれる。さらに他の教学ならびに管理運営者の代表、教育および医療関連行政組織、専門職組織、医学学術団体および卒業医学教育関係者が含まれてもよい）が、各医学部の使命・学修成果の策定、カリキュラムの改善や教育プログラムの評価に関与することが求められている。まさに、各医学部はその地域、国そして世界の医療へのニーズを考え、明日の医療を支える医師の養成という社会的責任を果たしていかなければならない。明日の医療を支える医師を養成するには、患者・家族が求める医療、地域の医療提供の特性、国が進めようとしている医療政策、そして日本が世界の医療に貢献するための方策を、各医学部がその独自性を持ちつつ、医学教育に取り入れていかなければならない。

医学教育と社会が繋がるためには、まずは医学部で行われる教育活動への患者・家族、地域市民の参加、医学部の使命・学修成果の策定、教育プログラム評価（PDCA）への参画、そして医学部の集合体と国や世界との連携を行っていく必要がある。英国では、①入学者選抜、②カリキュラム開発、③授業コースへの参加、④FDへの関与、⑤臨床実習の場での参画、⑥教育プログラム評価への参画などが行われている。学生に患者・家族が求める医療を知らせることができるのは患者・家族であり、医学部が立地している地域医療の特性を知らせることができるのは地域を場とした臨床実習である。臨床実習前教育と臨床実習教育に、患者・家族、地域の人々が加わることで、患者中心の医療を学生が学び、卒業生がその経験を活かし、明日の医療を支えることになる。今回のフォーラムでは Patient and public involvement in undergraduate medical education の英国の実践を伺い、現時点でわが国でも行っている患者の語りや地域医療の場での医療ニーズ体験の学習について紹介する。さらに、Society and medical education from a U.K. perspective として英国の医学教育の方針がどのように社会のニーズによって変化してきたのか、今後どのように変化していくのかもお話しいただき、日本の医学教育、医療政策の委員会に参加している市民から医学教育への期待をお話しいただく。